

## 「戦争と平和！」

## 第8回

## 本当の苦難は終戦後に始まった

塚本 二郎

まず、自己紹介を兼ねて満州での国民学校入学あたりから、ソ連参戦での逃避行、終戦、引き揚げまでの耐乏生活、帰国など少年時代に感じたことを思い出しながら書いてみます。

私の本籍は祖父母の住んでいた世田谷区祖師谷で、父は日本が不況の時満鉄の下請けで土木・建設業の会社に就職し満州に移り住みました。家族は父母と兄と姉の5人で、父の仕事の関係で京城、奉天、ハルビンと移住したと聞きましたが記憶がなく、入学前の牡丹江から断片的に思い出します。映画監督の大林宣彦さんによると『7歳の子どもであっても大人を冷静に観察できる年齢だ。敗戦時5〜10歳ぐらいだった自分たちを、戦前派でも戦中派でも戦後派でもなく、「敗戦少年世代」と呼ぶ』。私は昭和12年生まれなので敗戦時8歳になりこの年代に該当する。



旧満州国地図

## &lt;牡丹江時代&gt;

・社宅の屋根の上で飛行機を見るのが好きで、この事を母は近所の人に自慢げに話した時があり、面映ゆい思いをしたことがある。後で気がついたが、子どもを含め戦争参画意識を表現しなかったのだらうと思った。

## &lt;新京時代、ソ連参戦&gt;

・新京は満州国の首都で、かなり力を入れ理想都市が出来上がっていた。上下水道や蒸気暖房などのインフラ整備が進んでいて、たまに帰った世田谷と雲泥の差があった。

・満州は本土と違い、表面上は空襲とか避難訓練も少なく平穏でしたが、ソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄し1945年8月9日に侵攻して来た。会社は男を残して女、子どもを大連に避難するように指示したので、父を除く4人で満員の満鉄に乗り大連に向かった。

## &lt;大連時代・引き揚げ船を待つ&gt;

・大連に着き間もなく終戦の玉音放送を8月15日正午、社宅の中庭でラジオ放送を聞いた。特に取り乱す人はなく、今後の事が不安なのか放心状態で静かに聞いていた。その後、父が会社書類を携え大連に着き5人の再生活が始まった。

・開拓団員はソ連の軍隊のみならず、地元民から土地を収奪された報復として攻撃を受けた。男は主にシベリアに抑留され、女性、子ども、年輩者は暴行を受け、死亡、自殺、集団自決の地区もあったと聞く。また、子どものなかで中国残留孤児となった者もいて悲劇を生んだ。

旧満州と大連には155万人の日本人がいたが、20万人が死亡（内4割は開拓団員）シベリア抑留57.5万人の内5.5万人が死亡（寒さと飢え、重労働など）この辺の実態は帰国後分かった話が主で、当時は噂話程度だった。

・後で聞いた話であるが、軍人の多い中国、台湾の日本人を優先し（問題を起こす前に早く日本に戻したい）、家族中心の満州からの引き揚げは1946年4月から1年半で105万人の日本人が引き揚げてきた。（私たちは1947年2月だったので、大連の滞在期間は終戦から1年半となる）新京から着の身着のまま逃げたので売物が無く、食べものには親は苦勞したと思う。ただ会社は住居を確保してくれ助かった。

## &lt;帰国・佐世保へ&gt;

・日本の緑を見たときは感激したが、船中で父の容体が悪化し、佐世保に着いて即入院したがあっけなく死亡した。過労と栄養失調、妻子を日本に帰した安堵感なのか、もっと早く戻れば良かったのにと残念でならない。翌日海岸で茶毘に付されたが、10体以上はあったと思う。

## &lt;今後をどう考えるか&gt;

・余りにも無謀な戦争でなかったか。多くの優秀な人材を失った。

・国連の全加盟国により採択された「持続可能な開発目標(SDGs)アジェンダ2030」と「パリ協定」の実行により地球を破壊から守る。自国第一主義を排し「多くの国から信頼される日本へ」戦争の遠因になる、貧困、飢餓、教育・・・等、人や国の不平等をなくす。